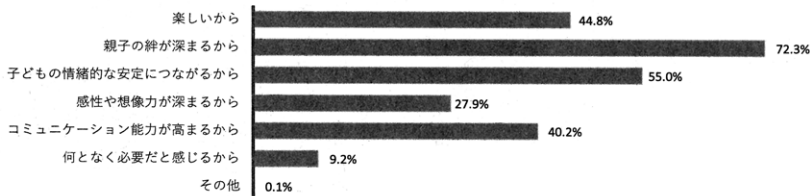


全国公立幼稚園「親子での触れ合い遊び調査研究」から ・こども園長会

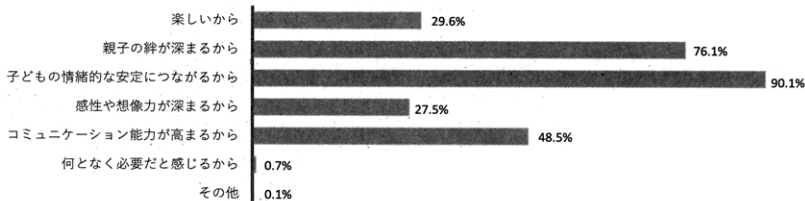
〈上〉

全国公立幼稚園・こども園長会（会長＝高橋慶子・東京都目黒区立みどりが丘こども園園長）は昨年度と本年度の2年間、「親子での触れ合い遊びを通して子どもの豊かな感性を育むための調査研究」に取り組んでいる。事業を進める特別事業委員会（委員長＝山口晃司・東京都中央区立明石幼稚園園長）は昨年度実施した調査の結果をまとめ、多くの保護者と保育者が親子での触れ合い遊びをする必要性を感じ、子どもの情緒的な安定や「コミュニケーション能力の向上などを理由として挙げたことなどが分かった。今回は調査結果の内容を紹介する。

触れ合い遊びが必要だと感じる理由（保護者）



触れ合い遊びが必要だと感じる理由（保育者）



「機会がある」保護者89%、保育者は66%

親子で触れ合い遊びをする機会がない理由について、保護者は「時間がない」「気力や体力がない」という回答が比較的多く、特別事業委員会では「就労家庭が増え、保護者の疲労感が感じられる」としている。中には「触れ合い遊び（遊び方や種類等）を知らない」という保護者もいた。

保育者は、園で親子での触れ合い遊びをする機会がないのは「年間行事に親子で触れ合う行事がない」「調査結果によると、家庭や園で親子で向き合って触れ合い遊びをする機会があるかについて、「頻繁にある」「時々ある」という回答が保護者は89・2%で、

「ない理由」は時間、気力・体力

保護者、保育者共に「必要性を感じる」

「時間が取れない」という回答が多かった。この結果から、特別事業委員会は「園で親子で触れ合い遊びをする余地はあると思われる」と分析している。

保護者自身が情報を得るきっかけとしては「保護者自身が子どものところに教えたりもらったりやっていた」という回答も一定数あることから、特別事業委員会は「園のみならず、地域の資源を生かした発信が有効である」としている。

親子での触れ合い遊びに成長の過程で、親子で触れ合い遊びをする必要性や保育者共に高い数値で必要性を感じていることが分かった。しかし、実態では触れ合い遊びをする機会が「あまりない」「ない」という回答もあり、必要性を感じながらも実践に至らないという実態が読み取れる。「親子での触れ合い遊びの意義や価値を保護者と保育者が共有し、教育課程や指導計画に位置付け、実践していくことが大切である」と分析している。

調査研究のねらいは、親子での触れ合い遊びを楽しむきっかけをつくり、保護者にその大切さを伝える活動を進めることで親子の触れ合いを広げ、触れ合い体験を豊かにしていくこと。

「親子での触れ合い遊びに関する実態と意識についての調査」は昨年10月に実施し、全国の公立幼稚園・こども園から選定した対象園（対象学年0～5歳児の保護者6184人、保育者963人が回答した。保護者に「どんな触れ合い遊びをされているか」という回答は保護者10・8%、保育者33・8%。特別事業委員会では「親子での触れ合い遊びをする機会が少ないと感じている園や家庭があることは課題である」としている。

「遊びをされているか」を聞いたところ、「くすぐり」「どっちの手に入っているか」など、保護者から子どもに投げ掛けるような遊びが多く楽しまれている。子どもが通っている園からの発信や園で体験する機会が「頻繁にある」「時々ある」という保護者の回答は87・5%で、園が活用した情報の発信や触れ合いの機会を設けるなど、園から働き掛けが求められている。

一方で「ほとんどない」という保護者の回答も13・3%あり、園や地域の実情を捉えながら、保護者と関わるさまざまな場面を活用した情報の発信や触れ合いの機会を設けるなど、園からの働き掛けが求められている。

三つの提言

「親子での触れ合い遊び調査研究」から

(下)

昨年度と本年度の2年間、「親子での触れ合い遊びを通して子どもの豊かな感性を育むための調査研究」に取り組んでいる全国国公立幼稚園・こども園長会（会長＝高橋慶子・東京都目黒区立みどりが丘こども園園長）は、事業を進める特別事業委員会（委員長＝山口晃司・東京都中央区立明石幼稚園園長）は、昨年度実施した調査結果を基に、親子での触れ合い遊びを通して子どもの豊かな感性を育むための提言をまとめた。

調査結果からは「多くの保護者と保育者が親子での触れ合い遊びをする必要性を感じ、子どもの情緒的な安定やコミュニケーション能力の向上などを理由として挙げたこと」などが明らかになっている。

これから、幼稚園・こども園や家庭・地域において、触れ合い遊びを通して子どもの豊かな感性を育むため、以下の三つを提言した。

提言1「遊びや生活の中で、子どもたちが触れ合い遊びを楽しめるようにしよう」

提言2「幼児期に触れ合い遊びをする大切さを保護者と共有し、『親子での触

れ合い遊び』を楽しめるようにしよう」

提言3「社会的課題を踏まえながら、地域とのつながりを活用し、『親子での触れ合い遊び』を積極的に楽しめるように発信しよう」

提言1「遊びや生活の中で、子どもたちが触れ合い遊びを楽しめるようにしよう」では「子どもたちが触れ合い遊びに親しみ、十分に楽しさを味わえるような保育（援助や環境）の工夫をする」「園生活の中で、触れ合い遊びの機会を計画的、積極的につくり、親子での触れ合い遊びを楽しめるようにする」とした。

具体的には、遊びや生活のさまざまな場面で日常的に触れ合い遊びに親しめるようにすること、興味を持って友達と繰り返し楽しむようにさまざまな触れ合い遊びを取り入れることを示している。親子での触れ合い遊びをする活動や行事を指導計画に位置付けると、触れ合い遊びの研修を通して実践に生かすことも挙げられている。

提言2「幼児期に触れ合い遊びをする大切さを保護者と共有し、『親子での触れ合い遊び』を楽しめるようにしよう」では「家庭で

できるさまざまな触れ合い遊びを保護者に伝え、親子での触れ合い遊びの機会を増やす」「保護者が触れ合い遊びの楽しさや大切さを実感し、家庭で日常的に触れ合い遊びを楽しめるようにする」とした。

その上で、園生活で子どもたちが楽しんでいる触れ合い遊びをさまざまな場面で保護者に伝えること、親子で向かい合って関わる時間を楽しめるように、保育参加や行事の機会を活用し、家庭でできるさまざまな触れ合い遊びを親子でやってみることを求めている。

提言3「社会的課題を踏まえながら、地域とのつながりを活用し、『親子での触れ合い遊び』を積極的に楽しめるように発信しよう」では「就労家庭が増え、親子で向き合う時間が取りにくくなっている実情や、コロナ禍の影響による直接的な触れ合いの減少などの課題を踏まえ、親子で触れ合う機会を広げたり、意識を高めたりする」「地域の行事や活動、地域の人材を活用し、親子での触れ合い遊びを楽しめるように、情報を発信する」とした。

そして、必要なこととして、現代の親子の実態や社

大切さ共有、家庭でできる遊び伝える

地域の行事や人材を活用して情報発信

会的な人間関係の希薄などに課題意識を持ち、触れ合い遊びを通して親子で触れ合うことの大切さや意義を感じられるようにすること、地域の人も巻き込み、地域全体でより良い親子関係や家庭環境を支えられるように、触れ合い遊びに関する情報を発信することを挙げている。

特別事業委員会の山口委員長は「今回の調査結果、提言を、全国の国公立幼稚園・こども園で積極的に活用してほしいと思っている。保育者の研修で『親子での触れ合い遊びについて、実際にはこのようなことができる』などと伝えることにも活用してほしい。そして、保護者会や保育参観などで触れ合い遊びの楽しさを園から発信し、共有してほしい」と話した。

全国国公立幼稚園・こども園長会



公立幼稚園・こども園で取り組まれた親子での触れ合い遊びを楽しむ活動の様子